
F棟北校舎

祥莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F棟北校舎

【Nコード】

N0765Z

【作者名】

祥莉

【あらすじ】

学校には、緑のカーテンが作られていました。その中のひとつに、奇妙なものが紛れ込んでいました。

試験中、教室の窓側の席に座るK君の耳に、ふと微かな羽を震わせているような音が聞こえました。

羽虫か。うるさいな。こんなのがあるからだ。

窓の外には、緑のカーテンが作られていました。

少しでも室温を下げる手助けになるように、学校では、糸瓜を栽培しています。それは実に、一階表の花壇から3階にあるK君の教室にまで育っていました。

確かに、見た目も室温も涼しいのですが、K君は虫が大の苦手でした。

やっぱり、席を変えてもらおう。こんなのがなければ、窓側の席は最高なのに。

再びテストに集中しようとする、と、視界の中に妙なものが映り込みました。

糸瓜のカーテンの中、ひとつだけ真ん丸な形のものがK君の目の前にあります。

西瓜みたいだな。

そう思って、よく見てみると、髪の毛の長い、人の首でした。

K君は息を吞んで、けれど何故か目を逸らすことができませんでした。

それは生首ではなく、やはり糸瓜のようです。けれど、それはど

う見ても目を閉じた若い女性の顔に見えました。

閉じているはず、それ以前に糸瓜であるはずなのに、妙な視線を横顔に感じます。K君は、何とか試験を終わらせました。

皆、「捨てろ」って言うに違いない。

そう思って、K君はこのことを誰にも話さず、クラスの皆が帰るのを待つことにしました。

後はホームルームを残すだけでしたから、それが終わると、一旦、図書室で時間を潰しました。

放課後の薄暗い教室に戻ってみると、もう誰もいません。

K君は、窓の外を見遣り、あの奇妙な糸瓜を探しました。

眠っているような女の顔をしたそれは、すぐに見つかりました。

どうして、今まで気づかなかったんだろう。

手を伸ばして、それをもいでみました。思ったより、表面はつるつるしています。

女の人の肌って、こんなにスベスベなのかな。

まじまじと見つめ、ゆっくりと顔を寄せました。

頬に当たる、ひんやりした感触が心地よく、K君は暫くそうしていました。

ふと、何か引っかけた感じがしました。

もいだ先端に糸のようなものが、ピンと張っていました。

長い髪の毛でした。

驚いたK君が、思わず糸瓜を床に落とすと、不思議なことに、それは真っ二つに割れました。

割れた糸瓜には、黒々とした髪の毛がいっぱい詰まっていました。

夏、窓を開けていると、たくさん羽虫がたかって授業にならなかったのも、先生方は専門家やPTAなどの色々な意見を取り入れて、虫の嫌がるハーブなどを糸瓜と一緒に植えたそうです。

K君の教室があるのは、中でも一番先に建てられた古い校舎でした。

数年前から、そこに植えられた糸瓜だけが変わなのです。

中を割ると、長い髪の毛や古い釘、生きた雨蛙が出てきたこともあります。

同じ頃からだと思いますが、校舎内の北寄りにある水道の蛇口は、すべて針金が巻かれています。

理由は知りません。不便ですが、仕方ありません。

今年も、糸瓜を植えると思います。

(f i n)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0765z/>

F棟北校舎

2011年12月13日01時01分発行